

第 42 章

3 ニーファイ 15 - 17 章

はじめに

モーセの時代におけるイスラエルの民は強情でかたくなだった。その結果、高い律法のすべてに従って生きる特権を失った（モーサヤ 13：29 - 31 参照）。その代わりとして、従うことが許されている高い律法の一部に加え、キリストのもとに来るために助けとなるモーセの律法（低い律法）が与えられた（教義と聖約 84：18 - 27 参照）。復活の後、イエス・キリストは、モーセの律法は御自分によって成就したとニーファイ人に教えられた（3 ニーファイ 12：17 - 18 参照）。「古いものは過ぎ去 [り]」（3 ニーファイ 15：2 - 4）、御自分が従うべき「律法であり、光である」と教えられた（3 ニーファイ 15：9）。

3 ニーファイ 15 - 17 章を読み、不信仰なユダヤ人と何事も素直に受け入れるニーファイ人の違いに注目する。救い主がエルサレムの人々に与えるのを差し控えられた真理と南北アメリカで与えられたすばらしい啓示とを比較する。救い主の教えを理解するには、信仰、熟考、祈りが必要なことに気づく。そのような犠牲を払うことにはこの上なく大きな価値がある。忠実な弟子たちが表現し難いほどの喜びを経験し、彼らに従う信仰篤い人々が奇跡的な経験にあずかったことについて読めば、このことは理解できるであろう。

注解

3 ニーファイ 15：1 - 10 イエス・キリストはモーセの律法をお与えになり成就された

・モルモン書の初期に登場する預言者は、モーセの律法は最終的には成就すると教えた。ニーファイもヤコブもアビナダイも、最終的にはモーセの律法の終了を受け入れることができるように人々を備えた。十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、ニーファイ人が古い律法を捨て新しい律法を受け入れることができた理由を明らかにしている。

「明らかにニーファイ人はこのことをユダヤ人よりも容易に理解しました。その理由の一つとして、ニーファイ人の預言者は別の律法がこの律法に取って代わることについてかなり入念に教えていたということが挙げられます。アビナダイは次のように語っています。『今はまだモーセの律法を守る必要がある。しかし将来、もはやモーセの律法を守る必要のない時が来ることを、あなたがたに言うておく。』」（モーサヤ 13：27）アビナダイと同様、ニーファイも次のように強調しています。『それゆえ、律法について語るのは、わたしたちの子孫に律法が無用であることを知らせるためである。また彼らが、律法が無用であることを知って、キリストの内にある命を待ち望み、律法が何の目的で与えられたかを知ることができるようにするためである。さらに、キリストによって

律法が成就して律法が廃されるときに、彼らがキリストに対して心をかたくなにすることがないようにするためである。』（2 ニーファイ 25：27、強調付加）

そのような教え、言い換えれば、無知なままにモーセの律法を守り続け、キリストに対して心をかたくなにすることがないようにという警告があったからこそ、当時の旧世界に生を受けた大勢の人々がその必要を満たされ（そして救われ）、今日、世界中の至る所に生を受ける大勢の人々も同じ祝福にあずかっているのです。（*Christ and the New Covenant* [1997 年], 156 - 157）

3 ニーファイ 15：2 - 8 モーセの律法と高い律法

・イエスはこう語っておられる。「古いものは過ぎ去って、すべてのものが新しくなった……。」（3 ニーファイ 15：3）ジェフリー・R・ホランド長老は次のように説明している。「モーセの律法は、それよりも以前に存在していたイエス・キリストの福音を構成する多くの基本的な要素の上に成り立っていた、つまりそれらの要素を含んでいた、ということを理解するのはきわめて大切なことです。主の御心によれば、モーセの律法は、イエス・キリストの福音から切り離されたもの、あるいは分離したものではありませんでした。また、イエス・キリストの福音に相反するものでもありませんでした。……その目的は高い律法の目的と何ら異なってはいませんでした。両方とも人々をキリストのもとに導くことを目的としていたのです。（*Christ and the New Covenant*, 147）だからこそ、イエスはこう語ることがおできになったのである。「見よ、わたしが民と交わした聖約は、まだすべては成就していないからである。しかし、モーセに与えられた律法は、わたしによって成就している。」（3 ニーファイ 15：8）

ニーファイ人とモーセの律法についての詳しい情報は、モーサヤ 13：27 - 35 の注解（144 ページ）を参照する。

3 ニーファイ 15：5 - 8 聖約は、まだすべては成就していない

・イエスが「預言者を廃止することはない」（3 ニーファイ 15：6）と語られた意味について話し合うために、3 ニーファイ 12：17 - 20、46 - 47 の注解（292 - 293 ページ）を参照する。

イエスはどのような意味で、「わたしが民と交わした聖約は、まだすべては成就していない」（3 ニーファイ 15：8）と語られたのだろうか。古代において、エホバはアブラハムと聖約を交わされた。アブラハムは、（1）永遠に続く子孫、（2）最終的には日の栄えの王国となる土地、（3）神の神権の力を約束された。これらの約束は、アブラハムの子孫に

対しても交わされ（教義と聖約 132：30－31 参照）、将来、成就することになるだろう。

3 ニーファイ 15：9

永遠の命を受けるために必要なものは何か。

3 ニーファイ 15：11－13 「この地はあなたがたの受け継ぎの地である」

• イスラエルの十二部族はそれぞれ、カナン¹の地で受け継ぎの地を割り当てられた。聖地で与えられた土地に加え、ヨセフの子孫は、受け継ぎの一部として南北アメリカの地も授かるという約束を受けた。救い主はニーファイ人の十二弟子に、彼らと彼らの民は「ヨセフの家の残りの者」（3 ニーファイ 15：12）であり、「この地はあなたがたの受け継ぎの地である」と言われた（13 節）。

• 十二使徒定員会のオーソン・F・ホイットニー長老（1855－1931 年）は、受け継ぎの地について次のように説明している。「モルモン書が承認しているアメリカのもう一つの呼び名は、『ヨセフの地』で、十二人の息子を祝福する際に族長ヤコブが（創世 49：22－26）、またイスラエルの十二部族に別れを告げる際に預言者モーセが（申命 33：13－15）言及しています。『泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、かきねを越えるであろう』というヤコブのヨセフに関する隠喩²は、リーハイとその一行がアジアから太平洋を横切りアメリカへ移住したことで成就しました。補足するまでもありませんが、このヘブライ人の族長は、これら西大陸の主要な特徴として、そびえ立つ山脈、アンデス山脈とロッキー山脈を『永遠の山』、金、銀、その他の鉱物といった自然の宝庫を『地の尊い賜物』³、すでに発見された神聖な記録ならびにこれから現れるその他の神聖な記録を『天の尊い賜物』と表現しています。」（“The Book of Mormon：Historical and Prophetic Phases,” *Improvement Era*, 1927 年 9 月号, 944－945）

3 ニーファイ 15：17 「一人の羊飼い」

• イエス・キリストは「良い羊飼い」と呼ばれることがよくある（教義と聖約 50：44；ヨハネ 10：7－18；アルマ 5：38－60；ヒラマン 7：18 参照）。羊飼いと羊との関係に関するたとえば、個人に対する思いやりと関心を象徴している。一人の現代批評家が、羊飼いの仕事にかかわる個人に対する思いやりの関係について語っている。



「羊飼いは、昼も夜も常に羊とともにいます。……羊は、風雨にさらされる場所で生活し、野生の動物や羊泥棒に襲われる危険性があるため、そうする必要があります。東アジアで最も見慣れた美しい光景の一つは、羊飼いが羊を牧場へと導く光景です。……羊飼いは羊がついて来るものと疑うことなく、仕事をしています。羊は羊で、羊飼いは自分たちから決して離れないと期待しています。……」

……羊飼いはいつも羊から離れず、羊に対する関心が強いので、自分の羊について熟知するようになります。……ある日、一人の宣教師がレバノンの最も荒涼とした地域で一人の羊飼いに会い、羊について様々な質問をしました。特に、羊の数を毎晩数えるのかどうか尋ねました。数えないと答えた羊飼いに、では欠けた羊がないことがどうやって分かるのかと尋ねました。次のような答えが返ってきました。『宣教師さん、わたしに目隠しをして、どの羊でもかまいませんから、わたしのところに連れて来てください。それからわたしの手をその羊の顔に当てさせてください。そうすれば一瞬にして自分の羊かどうか分かりますよ。』（ジョージ・M・マッキー、*Bible Manners and Customs* [日付不明], 33, 35）

• 十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926－2004 年）は、個人に対する思いやりについて次のように語っている。

「イエスは個人に焦点を当てて教え導かれます。……

……イエスは一人一人を知り、心にかけておられます。最もささいなことと思われる事柄にも目を向けておられるのです。」(That Ye May Believe [1992 年], 204 - 205)

3 ニーファイ 15 : 18

信じることと理解することはどのように
関連しているか。このことは福音を学ぶときに
どのように当てはまるか。

3 ニーファイ 16 : 1 - 3 他の羊

• 3 ニーファイ 16 : 1 - 3 を読むと、ニーファイ人以外にも「他の羊」がいること、また、救い主は彼らをも訪れる予定だったことが分かる。3 ニーファイ 17 : 4 には、これらの他の羊は「イスラエルの行方の知れない部族」であると書かれている。良い羊飼いは、御自分の群れをすべて見守り、必要に応じた配慮をお与えになる。

3 ニーファイ 16 : 3 - 13 イスラエルの集合

• イスラエルの集合についてもっと知りたい場合は、付録から「イスラエルの集合」(400 ページ)を参照する。

3 ニーファイ 16 : 4 - 7 わたしたちはモルモン書を通してキリストを知るようになる

• 十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、モルモン書の第 1 の目的は、わたしたちがイエスはキリストであると知るように助けることであると説明している。

「モルモン書の第 1 の目的はイエス・キリスト^{あかし}を証することです。モルモン書の 6,000 を超える節の中の半数以上は、直接イエス・キリストについて記しています。

『わたしたちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを預言し、また、どこに罪の赦し^{ゆるぎ}を求めればよいかを、わたしたちの子孫に知らせるために、自分たちの預言したことを書き記すのである。』(2 ニーファイ 25 : 26)」(『リアホナ』2005 年 5 月号、8 - 9)

3 ニーファイ 16 : 4 - 13 異邦人とはだれのことか

• モルモン書に出てくる異邦人という言葉は、ほとんどの場合、ユダヤ人ではない者すべてを指す。ユダヤ人とは、リーハイの子供たちのように、ユダの子孫およびエルサレム出身

の者すべてを指す。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長 (1876 - 1972 年) は、この定義によれば、多くの異邦人は実際にはイスラエルの血を受け継いでいると説明している。「この時満ちる神権時代において福音は最初に異邦人に伝えられました。そして次にユダヤ人に伝えられるはずです〔教義と聖約 19 : 27 参照〕。しかし、福音を受け入れる異邦人の大部分はその血管の中にイスラエルの血が流れている異邦人です。」(Answers to Gospel Questions, ジョセフ・フィールディング・スミス・ジュニア編, 全 5 巻 [1957 - 1966 年], 第 4 巻, 39)

十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老 (1915 - 1985 年) も、このことについて次のように述べている。「わたしたちはこれまで、ユダヤ人とは、ユダ王国の国籍を有する者および彼らの直系の子孫を指すと考えてきました。その際、どの部族に所属しているかについて言及することは一切ありませんでした。また、異邦人という言葉を使用する場合には、その他の人々は皆、異邦人であると考えてきました。異邦人の中には、行方知れずとなり散乱したイスラエルの残りの者たちが含まれていました。彼らの血管には、文字どおり、イスラエルと呼ばれた先祖の尊い血が流れています。したがって、イスラエルの最高位の部族であるエフライムの血を引くジョセフ・スミスは、異邦人であり、その手を通して、モルモン書が世に現れたのです。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、福音を有し血筋がイスラエルである異邦人であり、救いをレーマン人そしてユダヤ人に携えて行くのです。」(The Millennial Messiah [1982 年], 233)

3 ニーファイ 17 : 1 - 3 「わたしが述べたことを深く考えなさい」

• 福音を学ぶ生徒の中には、聖文を読む、あるいは預言者の言葉を聞くだけで十分だと感じる人があるかもしれない。しかし、救い主はニーファイ人に御自分の言葉を聞くだけではなく次のことを行うように指導された。「自分の家に帰り、わたしが述べたことを深く考えなさい。」(3 ニーファイ 17 : 3) そうすれば御自分が述べられたことを理解でき、戻って来られる (3 節) 「明日のために心」を備えることができると救い主は教えられたのである。このことは読んだり見たり聞いたりしたことを深く考えるようにと命じているその他の聖文とも一致する。モロナイは、モルモン書についての証を得るに当たっての不可欠な要素として、深く考えることを挙げた (モロナイ 10 : 3 参照)。ニーファイは読者にこう語っている。「わたしは主に関することに喜びを感じる。わたしの心は、これまでに見聞きしたことを絶えず深く考えている。」(2 ニーファイ 4 : 16)

・大管長会のマリオン・G・ロムニー管長（1897－1988 年）は、深く考える力について次のように述べている。

「わたしは、聖典を読んでいて、モルモン書によく出てくる『深く考える』という言葉に心を動かされました。辞書では、“ponder”は『心にはかる、物事について深く考える、じっくり考える、思い巡らす』という意味です。……

深く考えることは、思うに、祈りの一つの形です。少なくとも、多くの場合に主の御霊に近づく方法となります。ニーファイはそのような場合のことを語っています。

『さて、わたしは、父の見たことを知りたいと思い、また主がそれを明らかにしてくださいと信じて、思いにふけりながら腰を下ろしていたとき、主の御霊に捕らえられて、まことに、非常に高い山へ連れて行かれた。それは、まだ一度も見ることがなく、一度も足を踏み入れたことのない山であった。』（1 ニーファイ 11：1、強調付加）

その後、主の御霊により与えられた大いなる示現の説明が続いています。それはニーファイが預言者である父の言葉を信じ、自分が熟考し祈った事柄についてもっと多くのことを知りたいと強く願ったためでした。（『聖徒の道』1973 年 12 月号、570）

・神にかかわる事柄について深く考えることで、わたしたちは自己満足に陥らず、神に近づくことができる。ニール・A・マックスウェル長老は、福音を吸収し、いつもそれに従って生活することで避けられる危険性について説明している。「ラミアンプトムから礼拝した人々は、宗教をあまりにも儀式化してしまい、1 週間後にその聖台に『再び……集まるまで』神のことをまったく口にしませんでした（アルマ 31：23）。これに比較して、イエスが西半球の弟子たちをどのように指導されたか、その大きな違いに注目してください〔3 ニーファイ 17：3〕。救い主は家族をどのように重んじられたか、家族が深く考え、祈り、ともに備えることをどのように強調されたか理解してください。わたしたちが宗教を機械的な繰り返しにしてしまい、王国を最優先しないならば、わたしたちの心と思いが自然にほかの事柄に流れて行ってしまっても不思議ではありません。」（*Wherefore, Ye Must Press Forward*〔1977 年〕、30－31）

3 ニーファイ 17：2－3

救い主はニーファイ人に家に帰ったら何をするように命じられたか。祈り、深く考えることにはどのような利点があるか。幾つか挙げる。

3 ニーファイ 17：4 散乱したイスラエルは父にとっては行方知れずではない

・散乱したイスラエルの部族は人の知るかぎりでは行方知れずの状態であるが、神にとってはそうではない。神は彼らがどこにいるのか御存じである。「父は彼らを導いた先を御存じだからである。」（3 ニーファイ 17：4）御父が彼らのことを御存じであり、救い主が失われた部族を訪れられるということは、イエスが他の羊を訪問されたことに関するほかの記録を、わたしたちがいつの日か手に入れる可能性を暗示している。

ニール・A・マックスウェル長老はこう語っている。「まだ世に出されていない宝として失われた書物があります。現在世にある聖典には、このような失われた書物が 20 以上もあると述べられています。その中でも、最も大きく驚異的なものはイスラエルの失われた部族の記録でしょう（2 ニーファイ 29：13 参照）。キリストを証する第 2 の書物である貴いモルモン書がなかったならば、わたしたちは、キリストを証する第 3 の書物が世に出る日が迫っているということすら知らなかったでしょう。この第 3 の聖なる記録が世に出ると、真理を支える 3 本の柱が完成します。そして、まったき羊飼いの言われたように、『わたしの言葉も一つに集められる』（14 節）ようになるでしょう。またさらに、『羊は……一つの群れ、一人の羊飼いとなって』（1 ニーファイ 22：25）、歴史上のすべての神権時代が一つにつなが合わされるのです（教義と聖約 128：18 参照）。」（『聖徒の道』1987 年 1 月号、59）

3 ニーファイ 17：5－10 イエスは人々を癒し祝福された

・イエスが御自身の兄弟姉妹である人々に対して深い憐れみを抱かれたことは、3 ニーファイ 17：5－10 を読めば分かる。イエスは病気の者を御自身のもとへ連れて来るように言われ、彼らを皆癒された。ジェフリー・R・ホランド長老は、この霊的な時間が持つ力に焦点を当てている。「キリストは、病気の者や目の見えない者、足の悪い者や手の不自由な者、重い皮膚病にかかっている者や体のまひしている者、『どんなことでも苦しんでいる』者がいたら、自分のもと

へ連れて来るように、そうすれば癒してあげようと言われました。…… 神の洞察によって、イエスはそこに集まった人々がエルサレムの兄弟姉妹たちに行ったのと同じ奇跡を見たのと望んでいることに気づかれました。そして彼らが癒されるのに十分な信仰を持っていることをすぐに理解し、群衆が持っていた一つ一つの必要にこたえ、『御自分のところに連れて来られた者をことごとく癒された。』そのようなあふれんばかりの哀れみと憐れみにこたえて、すべての群衆が、癒された者も健康な者も、文字どおり、『イエスの足もとにひれ伏して、イエスを拝した。また、…… 近づくことのできた者はイエスの足に口づけし、涙でイエスの足をぬらした』のです〔3 ニーファイ 17:5 - 7, 9 - 10〕。(Christ and the New Covenant, 268 - 269)

3 ニーファイ 17:11 - 24 「あなたがたの幼い子供たちを見なさい」

・マイカリン・P・グラスリ姉妹は、中央初等協会会長として奉仕していたころ、霊的な経験に対する子供の能力について次のように語っている。

「救い主が最も聖い^{きよ}教えを子供たちにだけ聞かされ、群衆に教えを伝えられるように、子供たちの口を緩められたことは、わたしにとってきわめて大切な点です (3 ニーファイ 26:14 参照)。

救い主がニーファイ人を訪れられた後、200 年間、民が平和と正義のうちに暮らしたことは何の不思議もありません。奇跡的な教えと数々の祝福を受け、主が民と民の子供たちへ関心を向けられたために、彼らの子供、孫に至るまで何代にもわたって正義が確立されました。

正義を永続させる現代の子供たちの能力や可能性を低く評価しないようにしましう。教会の中で子供たち以上に敏感に真理に反応する年代はありません。」(「汝らの子供たちを見よ」『聖徒の道』1993 年 1 月号, 106)




© 1995 デル・パーソン

・チリの教会員は、スペンサー・W・キンボール大管長 (1895 - 1985 年) が訪問したときに同じような経験をした。「わたしはチリでステーキ会長を務めていたときに、子供たちに対するこの上ない愛の表現を目の当たりにしました。スペンサー・W・キンボール大管長は、地域総大会のためにチリを訪問していました。4 か国から集まった教会員が 1 万 5 千人を収容する競技場に集合しました。わたしたちは大会が終わってからキンボール大管長に何をしたいですかと尋ねました。すると目にたくさんの涙を浮かべ、『子供たちに会いたいです』という返事が返ってきました。神権指導者の一人が、キンボール大管長は競技場で子供たち一人一人と握手をし、子供たち一人一人に祝福を残したい^{がくぜん}そうですとマイクで発表しました。その場にいた人々は愕然としました。その場がシーンと静まり返りました。キンボール大管長は、およそ 2,000 人の子供たち一人一人と握手をしました。握手をしたり、キスをしたり、頭をなでたり、祝福をしたりするときに涙を流しました。子供たちはとても敬虔^{けいけん}で、彼を見て、涙を流しました。キンボール大管長は、自分の生涯でこのような御霊を感じたことはないと言いました。チリの全教会員にとって生涯でもほんとうにすばらしい瞬間でした。」(ジャネット・ピーターソンとエドアルド・アヤラ, “Friend to Friend,” *Friend*, 1996 年 3 月号, 6 - 7)

理解を深めるために

- ・救い主の次の言葉はどのような意味だと思うか。「見よ、わたしは律法であり、光である。」(3 ニーファイ 15:9)
- ・イエス・キリストが御自分の教えられたことを深く考え、理解できるように天の御父に願うようにと民に命じられたのはなぜだと思うか。この過程は、自らをイエス・キリストの次の訪問に備えるうえで、どうして大切だったのだろうか。
- ・モルモン書の聖約を理解することはどれほど大切だと思っているだろうか。

割り当ての提案

- ・ヨハネ 10:16  で述べられている「他の羊」に関する説明を友人または家族と分かち合う。
- ・自分が 3 ニーファイ 15 - 17 章で述べられている驚嘆すべき奇跡や出来事を^ま目の当りにした人々の一人だとしたら、どのような気持ちがするだろうか。友人と話し合う。